

# ノベルティー 英国人たどる

瀬戸

## 支えた人たちから聞き取り

英国人陶芸作家で焼き物に関する研究をしているクリストファー・マクヒューさん(四七)が、瀬戸市を訪れて伝統窯業のまちとしての文化や歴史について調べている。瀬戸のノベルティー(陶磁器製の置物や装飾品の総称)を支えた人たちへの聞き取り調査を行い、その作品と技術に光を当てようとしている。(吉本章紀)



角谷さん(左)にインタビューするマクヒューさん＝瀬戸市新道町で

マクヒューさんは二〇一五年に、国内外の陶芸やガラス作家が瀬戸市に滞在して制作活動に取り組む「アーティスト・イン・レジデンス」の招聘作家として滞在。市内で採集したノベルティーの破片などを組み込んだ『瀬戸物語』という作品を制作した。

その後個人的にマクヒューさんは翌年にかけて、「瀬戸物語」のシリーズ作品の完成のために瀬戸を訪れて思いを深めた。現在は北アイルランド・ベルファストの国立アルスター大学の窯業陶芸博士で、その研究の一環として、「衰退をきわめるイギリスの陶都と瀬戸とを比較考察しながら、伝統窯業の町の文化と誇りとは」というテーマを持って二年ぶりに訪れた。

今回は二・七日の日程で、瀬戸ノベルティ文化保存研究会代表の中村儀朋さん(六八)のコーディネートを受け、ノベルティーの企業や絵付け職人らと面会。三日にはノベルティー絵付け職人だった瀬戸市新道町の角谷信吉さん(六五)から話を聞いた。

マクヒューさんは角谷さんの自宅でインタビュー。角谷さんは、父が石川県出身で、幼いこ

ろから絵付け作業を間近で見ていることや、自宅横の工場で見や妻らとノベルティーの絵付け仕事をしていたことなどを詳細にわたって語った。

マクヒューさんが若手に絵付けの技術が伝承されているか問うと、角谷さんは「若者の絵付け(職人)はいない。今は(ノベルティーの)仕事もないので寂しいわ」。技術の伝承方法については「絵の具の調査でも口で教えるのでは絶対にわからない」と答えた。

以前、絵付け工場として使われていた二階建ての建物にも足を運んだマクヒューさんは、残っている筆や机、椅子、棚を写真に収めた。職人としての誇りについてマクヒューさんが質問すると「それだけの数をこなしていたから。がむしゃらにやっていた」と角谷さんは話した。

マクヒューさんは「技術に興味があり、次の世代にも伝えたい。英国では衰退してもう何も残っていないが、瀬戸には今も人もモノも残っている」と強調する。工場が今後取り壊される予定であることに触れ「全部なくなるのはもったいない」と残念がった。

マクヒューさんは再度瀬戸を訪れて来年論文にまとめる予定だという。